粉体工学国際シンポジウム印象記

—1972年10月15日 京都国際会議場—

牧野 和孝
Kazutaka Makino

はじめに

第1回太平洋化学工学会議のあとをうけて同じ京都国際会議場で粉体工学国際シンポジウムが1972年10月15日に開催されました。美しく秋深い京都の雰囲気を反映してか、シンポジウムは実り多い討論と多くの友好とを残して無事終わりました。ここに当日のすべての参加者と主催者とともに本印象記を書くにあたり喜びを分かちあいたいと存じます。

熱気につつまれて

熱気につつまれた会場、聴衆の視線はリズミカルな若々しい身振りの Rumpf 教授に集中している。シンポジウム独特の緊張のなかに多くの著名な方、会社の方、若手研究者の方の顔が印象的に映る。会場内の参加者全員がこの充実した雰囲気のなかにひたりきり活発な討論を展開させた。

国際シンポジウムにおいてもっとも大切なことは外国からの参加者との語学の壁をのりこえた友好的討論であると思う。自分の思うことが相手になかなか伝えられない。しかしながら、自分の語学レベルで必死(?)に表現し伝えようとする。私はこの努力と忍耐が国際的理解を

Rumpf 先生御夫妻

昭和27年12月6日受理

* 京都大学工学部化学工学科 (〒606 京都市左京区吉田本町)
TEL 075-751-2111

深めるのに大切と思う。そして多くの研究者・技術者がこのシンポジウムで討論に参加したり、外国の研究者との会場での接触を通じたりしてこのような相互理解への努力を体験できたことに大きな意義を感じる次第である。この意味で参加者の一人として内外の粉体工学研究者を一同に集めた粉体工学国際シンポジウムの主催者に心から敬意を表わしたいと思う。

外国からの先生方に謝意を表わそう

私達がこのたび粉体工学国際シンポジウムという素晴らしいチャンスを有意義に終えることができましたのも、外国の先生方の貴重な御協力があったからだと思

Rumpf 先生

Lapple 先生と井伊谷先生

Lapple 先生(左), Nienow 先生 (左から2人目)
と Rowe 先生 (左から3人目)

Nienow 先生

Gauvin 先生

Wang 先生

う。ここで、当日講演していただいた先生方に敬意と謝意を表わし、ここに先生方の在日中のスナップ写真を掲載させていただきます。そして、また外国の研究者の参加者としてオーストラリアの Underdown 先生とドイツの Möller さんがいらして下さいました。Underdown 先生は狩野さんの質問にお答えされた方です。また Möller さんは Rumpf 先生の隣りにいつもおられたベルリン工科大学出身の若い方です。

会場係からおわび

当日の会場の運営につきまして何分不行き届きな点が多々あったろうかと思えます。私たちは私たちに反省をしたり、気づいた点が多くありましたが、これを舞台として生きたいと存じます。さて、もっとも残念に思いますことはカメラの管理のことでありました。実は、この本文の初めに全員でとった写真を載せる予定だったのですが、カメラ操作の不手際でフィルムの一部に光をあててしまい、そのため全員の記念撮影を印刷にとどめることができなくなりました。ここに、誌上にて深くおわび申し上げる次第でございます。

粉体工学国際シンポジウムの講演用プリプリント (粉体工学研究会誌, Vol. 9, Autumn, 1972) はいかがでしたか?

本シンポジウムでの講演用プリプリントはもちろんシンポジウム当日のためのものでもありますが、私はこれを見たとき、国際交流のためは当然のこととして講演当日よりもむしろそれ以後のための目標として作られているように感じました。特に日本の先生方の recent works シリーズはそうです。そして、その延長線上に List of Research Group on Powder Technology in Japan があるのです。このプリプリントの構成はこれからの国際シンポジウムにとって非常に参考となるように思います。あらためて、このプリプリント作成のため多大の御骨折りをいただいた井伊谷、神保両教授に敬意を表わしたいと思います。

さいごに

このシンポジウムは終始なごやかでかつ活発な討論が展開されました。そして、本シンポジウムへの参加者はもちろんのこと、当日参加されなかった多くの方々へも幾分なりとも雰囲気御伝えできれば望外のよろこびとするところであります。